

『日本のきれいを海の方こうから来たあなたへ』

寺田 晃(てらだ あきら)

9,978文字

あらすじ

子供たちが巣立ち生きがいを失いどん底の妻・涼子。家族が立ち上がり留学生を迎えることで妻の輝きを取り戻そうとする。涼子は留学生のアニタと接することで日本人の中に在るきれいの原点を意識していく、そしてアニタも触発され日本のきれいに魅了されていく。

私・徳崎康介は几帳面できれい好きである。

だから妻・涼子の最近の自堕落さには壁壁する。部屋には埃が溜まり、新聞や雑誌が散乱し、シンクはその日の食事の残飯と食器が小山をつくる。玄関はいつも数足の靴や草履が不揃いに並び、この都会の何処から持ち込まれるのかわからない細かいごみがうっすらと覆っている。私は定年後も働いている。疲れて帰宅して夕食を作り、シンクの残飯処理と食器の洗浄も行っている。しかしその他の事までは手が回らない。と言うよりも、家庭の雰囲気をもどませるような無気力な妻の顔を見ているとやる気が起こらない。ただ妻の行為には同情の余地もある。

結婚して30年。子供にも恵まれ息子はすでに結婚し孫が誕生、娘は独身だがいずれも実家を離れ暮らしている。だから夫婦二人きりの生活である。傍目から見ると、うらやましい家族なのだろう。近所の人からは「徳さんの家族は幸せね、家(うち)はたいへんよ。子供は就職できないし、旦那は飲んだくれで・・・。」そんな時、妻は「そうでもないよ、毎日退屈で。やる気が出ずに落ち込んでいるの。」と御託を並べる。

妻と私は勤め先で恋に落ち結婚した。結婚後、息子の誕生とともに専業主婦に収まった。それから2年後に娘が誕生、毎日が楽しかった。妻は子供たちの成長に貢献してくれ、子供たちはすくすく成長した。小柄で運動能力が劣る(と思い込み)息子を心配して幼児の体操教室へ通わせた。幼い娘を背負い、息子の手を取り通い続けた。しばらくすると娘をスイミングスクールへ通わせた。娘の長い手足は水泳に向いていると、主婦仲間の入れ知恵によるものだった。あの頃の妻は輝いていた。

妻は子供たちのしつけに厳しかった。それは日常生活に関わることで、時間を守る、整理整頓をする、挨拶をすることである。起床時間になると眠たくても泣いても起こしおはようと挨拶させ、就寝時間になるとおやすみを言わせて布団に入り目をつぶらせる、着替えた下着は洗濯かごへ入れるなど、子供たちには母親が鬼のように思えたことだろう。しかし子供たちの順応は早かった。息子も娘も3歳頃には、母親に注意を受けることが少なくなった。これは不思議なことではなく、妻は子供たちの行為のひとつひとつにちゃんとご褒美を準備していた。馬の鼻先に人参をぶら下げるとよく走るが如く、子供たちのやる気を引き出した。ご褒美はケーキや誉め言葉など、その行為を子供たちのやる気を引き出す道具として効果的に使った妻の知恵に感心したものだ。

このようにして我家の子供たちはすくすく成長していった。育ち盛りの子供が二人いる家庭にしては、整理整頓が行き届ききれいな家庭だった。

その後息子は大学進学、娘は専門学校へ進学するため実家を離れ、これが引き金になった。妻にとって子供たちが生きがいであった。息子と娘が実家を離れるまでの18年間、我家はさながら妻が経営する個人商店だった。朝から夜まで、店主である妻が店員である息子や娘へ目配り気配りをして経営を維持する。個人商店なので、店主の性格が店員に大きく影響する。小さな店なので、各自がしっかり働かないと直ぐに売り上げが落ちてしまう。だから店主は半人前の店員をうまく乗せやる気を出させ、売り上

げ(人間としての成長)を上げたいと頑張った。

しかしふたりが実家を離れてからの時間が妻へ容赦なく襲いかかり、覇気が次第になくなっていった。それと反比例して毎日傍にいた子供たちとの思い出が増大していった。そしてそのことがさらに妻を消沈させた。毎日何をするでもなく、ソファに身をゆだねため息をつくことが多くなった。子供たちは長期休みには帰省したが、すぐに戻った。ふたりとも就職しても実家に戻らなかった。「親の心子知らず」だと妻は嘆いた。

妻がこのような状態では、家庭は混乱する。途方に暮れた私は、子供たちに相談した。子供たちが実家を離れたことが遠因であることは間違いなく、責任を感じて真剣に考えてくれた。

「私たちのどちらかでも実家に戻るといいのだけれど・・・。」

独身の娘の言葉に息子は黙っていた。息子にはすでに家族があり、子供も授かっており同居は容易ではない。娘にしても実家に戻っても就職先はない。

「何か趣味を持てばいいのにね。」

娘がつぶやいた。思い起こせば、結婚後は子供たちに縛られ趣味らしきものを持たなかったのは確かだ。

「趣味を持っていれば、それに没頭しているだろう、多分無いんだよ。」

と、息子が結論めいたことを返した。私もその通りかも知れないと思った。ではどうすればいいのか。沈黙の後に息子が口を開いた。

「かあさんはね誰かに何かをして喜んでももらいたいんだ、そのことで自分自身に張り合いを感じていたのだと思う。」

「そうそう、それよ。体操教室の演技発表会で、一生懸命な兄さんの姿に涙を流していたのを覚えているわ。」

「お前だって、スイミングでバタ足ができなくてかあさんが先生に頼んで特別コーチをしてもらっていたじゃないか。」

このような思い出話が続いた。すると誰の頭の中にも同じようなイメージが描かれた。

「誰かに喜んでもらえるような趣味を見つけてあげればいいのか。」

「そう、そう。」

私の言葉に娘があいつちを打った。そしてしばらく沈黙。息子は腕組、娘は天井を見上げ、私は目を閉じて考えた。

「やはり近くにいるとうさんの世話で元気になるのが一番では？」

息子がボソッと口を開いた。

「おいおい、今さらベタベタされるのはごめんだ。それにそんなことでは元気にならないよ。」

「なんで？」

「女房は私を夫として一人前の大人と認めているから、面白みがないよ。」

「だったら兄さんの孫を相手にするのはどう。」

「それはだめだ、家(うち)の嫁にストレスがかかって、孫も嫁もノイローゼになってしま
う。」

「少し前から頭の片隅にぼんやりと生まれてきたんだけど……」

「いいアイデアなの早く聞かせて！」

続けようとする私に、娘がせつついた。

「うん、まず浮かんだのが孫の顔だった、でもダメなんだ。それでお前たちの会話を聞
いていたら、孫の顔が外国人の顔に変わったんだ。」

「何それ!?結論は。」

「だから留学生を受け入れればどうかな。」

「それはいい考えかもしれない。」

息子は冷静だった。

「かあさんが留学生を私たちの子供の頃のように世話をするということ、大丈夫？」

「世話をするのは食事と日本文化の伝道師としてだと理解すればどうだ。」

と娘の疑問に私は答えた。今までの会話の中で熟成され、やっと思えがまとまった。

「いいんじゃないかな。かあさんがそのように理解すれば、うまくいくよ、きっと。」

「そうね、かあさんが日本人のお手本になるってことよね。部屋も空いているしね。」

「それはオーバーな表現だけれど、日本の歴史の中で狭い国土に小さい家を建てて、
いかに巧みにきれいな生活空間を創り上げてきたのか、わかってもらえるかもね。」

「やっぱり、整理・整頓・清掃・清潔が基本よね。」

息子と娘の会話は弾みすぎているとは思ったが、これで妻が元気を出してくれれば
それに超したことはない。

「でも留学生はどのようにして受け入れるの？」

「ボランティアで留学生の世話をしている大学の後輩がいるから、頼んでみるよ。」

「とうさん、かあさんへちゃんと話してよ。とうさんの説得次第なんだから。」

娘に念押しをされ、その日の相談は終わった。

子供たちと相談して、これからの方向性が見えたような気がした。しかし自宅に戻り妻
の覇気のない顔を見ると、このような状態でほんとうに留学生を受け入れられるのだろ
うか、と不安がよぎった。しかし自身を奮い立たせ、夕食後に切り出した。

「調子はどうだ、少しよさそうに見えるけれど。」

妻の前には食べ残した煮物の小鉢が置かれていた。私の問いかけに視線をこちらへ
向けたが、心はどこか遠くにありそうな表情だった。私は続けた。

「子供たちも実家を離れ、部屋も空いたままだ。だから……」

子供たちの名前が出た途端に妻の表情がやや暗く変化したように感じた。

「子供部屋が空いているから、誰かに貸してもいいかと思うんだ。」

妻の表情は変わらなかった。

「実は知り合いから、その人はボランティアで海外からの留学生を世話しているだけ

れど、この近くで受け入れてくれる家庭はないかと相談を受けたんだ。」

「それで、家(うち)が夫婦ふたりで部屋が空いているなら考えてもらえないか、と……」

妻は沈黙が続き返答はない。

「どうかな、ちょっと考えてみようか。結論はいつでもよいから。」

その日はそれで終わった。

それから数日過ぎたが、妻からは何の言葉もなかった。そしてさらに数日過ぎたころ、娘からの電話が鳴った。

「どうさん、計画うまくいったようね！」

「なんだって……」

「留学生を受け入れる件よ！」

「どういうことだ、こちらでは全く進展はないけど……」

「今ね、かあさんからメールで、実家の私の部屋に留学生を住まわせてもいいかって。」

「ほんとか！？かあさんから何も聞いてないぞ！」

「どうさんへ話す前に、私たちの了解を取りたかったのよ、きっと。」

娘からの連絡で息子へも確認しなければならぬと思い、電話をかけた。すると、娘と同じようにメールで連絡があったとの返事だった。目の前が明るくなった。その日はいつもより早めに帰宅した。玄関に入ると、きれいになっている。

「ただいま。」

いつもより明るい声が自然に出た。リビングから掃除機の音が聞こえた。近くへ行くと

「おかえり」と迎えてくれた。表情も明るくなっている。こんなにも変わるものなのか。

私が妻へ留学生の受け入れの話をしてから、1週間ほどで覇気が戻ったことになる。「女心と秋の空」とはよく言ったものだ。妻の中ではどのような変化が起こったのだろうか。気になって記憶をたどると、徐々に変遷しているのがわかった。

1日目	: 留学生の受け入れを話す	変化なし
2日目	: いつもと変わらず	変化なし
3日目	: そう言えば洗濯物を干していた	小さな変化
4日目	: 近所で井戸端会議をしていた(久しぶりだ)	小さな変化
5日目	: 朝ゴミ出しを妻がしていた	中くらいの変化
6日目	: 息子と娘へ連絡(部屋の使用許可)	大きな変化
	玄関がきれいになった、リビングを掃除していた	大きな変化

娘からの電話でやっと妻の変化がわかったのは、配偶者として失格だ。この1週間足らずの妻の回復ぶりは、凄まじかった。その日の夕食後、

「留学生を受け入れてもいいわよ、子供たちも部屋を使っていいって。」

弾むような明るい声だった。

「どういう心境の変化なんだ。」

「それがよくわからないの、でも何か楽しいことが起こりそうな気分になってきたの。」

「そうか、それはよかった。」

「近所の方から旅行やヨガ教室などに誘われたけれど、どれも興味を持てなかったの。」

「それで、落ち込んで自堕落な生活になったのか。」

「傍から見ればそうかもしれないけれど、私としては一生懸命に探していただけなの。」

「何を・・・」

「やりがいよ。私のやりがい。」

「留学生の世話が、やりがいなのか。」

「それは手段、あなたが留学生の受け入れをどうかとってくれたことで、探し求めている回路が繋がったのよ。」

それから 1 時間にもおよぶ妻の熱弁を聞かされた。妻は言う。私は何かやりたいことが見つからないとやる気がなくなり、自堕落そのものになってしまう。だから掃除も洗濯も、ゴミ出しも何も手につかなくなる。時に考えこんで、時にフラッと出かけてしまう。しかし決して躁鬱状態になっていたわけではない。子供たちが小さな頃は、成長する子供たちの姿に感動して夢中になった。自分の分身が育っていくのは楽しかった。子供たちが実家を離れてからは夢中になるものがなくなったと感じ、一気に気持ちがしぼんでしまった。少し前に留学生受け入れの話聞いた時は、それほど思うところはなかった。でも街中で観光客や時には働いている外国の人たちを見ていると、いっしょに生活して日本を知ってもらうのもいいかな、と感じた。特に日本文化、暮らしに密着した生活文化のよさを知って欲しい。これからは日本の国際化が益々重要になってくるから、その一端を担ってみたい、と。

何という大胆な考えなんだ、と思わずにはいられなかった。

「それで、具体的にどうしたいの。」

「こんな小さな国土に1億3000万人もの人々が住んで、それぞれが小さな住居で文化的でかつ効率的な生活をしているの。特に日本人の清潔感は、奈良・平安時代にまでさかのぼれるほどの歴史があるのよ。清潔な生活空間が、狭い住居に多くの家族が住むための基本なの。この空間を是非、留学生に体験して欲しいわ。」

留学生1人を受け入れるのに、そこまで意味を持たせるとは。そして、そこまでして自分自身を納得させようとする妻を見直した。それから家の中は、以前と同じようにきれいに片付いていった。妻の掃除は徹底していた。隅から隅までピカピカは当たり前。フローリングの床の小さな傷もワックスで何度も拭き取り、壁のクロスはアルカリ電解水で清掃して汚れを取り、曇ったガラスはマイクロファイバーの布で力を込めて拭き、玄関の靴箱は靴を全て出し清掃、靴は底に付着した小さな石やゴミを使い古した歯ブラシで擦り……。何日もかけた。そして最後はいつもきれいな状態がどういう状態なのか、目視で判定するのが当たり前になった。妻のきれいは、それぞれの構成要素が生活空間

の中でどのように美として輝いているのかということだった。

それから1ヶ月後の9月、海外であれば新学期が始まる時期に留学生を迎えた。スウェーデン出身で母国の大学で日本語を学んだ20歳の女子学生で、初日の挨拶は日本語だった。

「私はアニタ・アルハンコです。これから1年お世話になります。よろしくお願ひします。」

言い終わると頭を下げて挨拶した。流暢な日本語ではないが、ひとことひとことがしっかり発音され聞きやすかった。近くの大学で日本文化を学ぶのだと言う。妻も私も好印象を持った。特に妻は、自分自身が目的としている留学生へ日本文化の生活習慣を伝えたい、その思いがピッタリ一致すると思ったようだ。

「アニタと呼んでください。」

「私は涼子と呼んで、主人は康介よ。」

妻はアニタを2階の娘が使っていた部屋へ案内した。

「自由に使って頂戴。」

「ありがとうございます。日本に来る前に送って頂いた写真を見て、パパやママも家族みんなが気に入りました。日本人はきれい好きな国民なのだと理解しました。」

妻は受け入れる留学生が日本での生活に不安を抱かないように、前もって家の全景と部屋などの写真をボランティアの方を通じてメールで送っていたのだった。

「気に入ってくれてうれしいわ。」

「涼子や康介には、一般生活における日本文化も学びたいわ。」

妻も私も呼び捨てにされたことにやや戸惑ったが、目の前にいるのは北欧から来た若い女性である。それが母国の文化なのだろう、と受け取った。

その日から新しい生活が始まった。アニタの滞在期間は1年間、この短い期間で多くのことを吸収しようとする姿勢を見せた。数日もすると、娘の部屋はアニタ流に様変わりした。机の上に家族の写真が飾られ、押し入れの戸は外され小さな花瓶が数個並び、その横にフィヨルドを思わせる北欧の港町の大きな写真が飾られた。好奇心の強い涼子は、アニタの生活が気になり、時々部屋をノックした。そして、時に自分の子供を注意するように言った。

「アニタ、日本の布団はね、毎日あげないと湿気てしまうのよ。」

と言いながら布団をたたみ、すでに押し入れは使われていたので部屋の隅へ置いた。

「1週間に1度は布団干しと言って、天気の良い日に外で干すのがいいんだけど、今はね布団乾燥機があるの。便利なの。今度の休みに教えるから。」

次の休日にふたりで部屋の掃除と布団を乾燥した。娘の部屋は板張りに絨毯を敷き、その上に布団を敷いていた。掃除機をかけ終わると、妻は粘着ローラを使って絨毯の上を素早くコロコロと動かした。

「見て、掃除機で掃除してもこれだけゴミや髪の毛が残っているの。」

「オー、ほんと。私の国ではこんな掃除用具は使っていません。」

「そうなの、でも単純なんだけど優れものなのよ。」

アニタは布団乾燥機にも驚いた。妻は自慢げに講釈を続けた。

「このようにして熱風を送ると布団を乾燥できて、またダニなどにも有効なの。乾燥が終わると冷風にして冷ますのよ。その後で掃除機でダニの死骸などを吸い取るの。」

「ダニの死骸、見えるのですか。」

「見えないわよ、でも湿気があるとダニが繁殖するの。」

妻は休日や夕食後にアニタに話しかけた。また時には私も含め3人で散歩したり、ショッピングなどに出かけた。ある休日の夕方、近くの公園を3人で散歩しているとアニタが不思議そうに口を開いた。

「あそこの歩道で草を刈り取っている方は、少し前にもみ見たわ。清掃員なの。」

アニタが指で示した先には近所のAさんがいつものように清掃をしていた。

「公園がいつもきれいで気持ちがよいうに、自主的に行ってくれているんだ。」

と私が答えた。アニタは公共の場所なのになぜ市が実施しないのか、と聞いてきた。私は市の予算が少なく十分な清掃活動ができないことを説明した。また妻が日本人は奥ゆかしい民族で「私はボランティアを率先して行っています。」と言う人は少ない、と説明した。

「例えばどのような事例がありますか。」とアニタが質問してきた。

妻は待ってましたとばかりに説明を始めた。

「日本人は昔から狭い地区で隣り近所が肩を寄り添って生活してきたの、だから喧嘩していたら生活できないのよ。それでお互いに助け合ってきたの。今もその習慣が残っているのよ。」

「朝起きると、家の前の道路を掃き掃除するのも、公園での草取りもそうなの。」

「そのような小さな行いが、住む街のきれいさを保ち、私たちの心も洗われるの。」

ずっと聞き入っていたアニタが、妻の言葉をさえぎり質問した。

「そのような行いをしている人に声をかけないんですか。」

「もちろん声をかけるけれど、ここがポイントなの。」

「ん？」

「日本人はね、慎み深くてシャイな人が多いの。だからありがとうと声をかける人は少なく、どうも、という言葉や、すみません、などで表現することが多いの。」

「どうも、すみません？謝るときの言葉ですか？」

「どうもとは、どうも言えぬという昔の言葉に由来していて、あなたの行いはどんな表現しても言えないくらい難しいほど素晴らしいですよ、という意味なの。近年はどうもありがとう、などと使うことが多くなっているの。」

「すみません、は後悔の気持ちを表し、あなた一人にそのような行いをさせてしまって申しわけない、という意味なの。」

「このような民族は世界でもまれだと思うわ、日本人のころをもっと学んでみたくなりました。」

「日本の国土は森林が多く、住める平野が少ないの。そんな狭い国土に多くの人々が暮らしていかなければならなかったの、他の人とのトラブルを避ける方法を自然と身に付けてきたのよ。」

「言葉の意味が深く、それが暮らしと密着しているのがわかったわ。」

「日本人のきれい好きもそのような歴史から生まれたものなのよ。私の両親が子供の頃までは狭い家に大家族だったので自分の部屋などなく、みんなが同じ部屋を使うため、誰もが気を使ったのよ。掃除と整理は各自が率先して行うのが当たり前だったの。」

このような会話を通じて、妻とアニタは親子のような関係を形成していった。アニタは実の子供のように涼子に甘え、涼子も娘のように接した。そしていつの間にか、涼子や康介から、

「おかあさん、お風呂の支度できたわよ。」

「おとうさん、新聞を廃品回収に出すので手伝ってよ。」

と呼ぶようになり、外見を除くと日本人になり切った。

実の娘のようになると、時に衝突もある。息子夫婦が4歳の子供を連れて帰省していた時だった。孫が庭で泥んこになって遊んでいたが、そのまま裸足で家の中へ入っていった。それを見たアニタが、大きな声で注意した。

「駄目よ、ちゃんと足を洗いなさい。おかあさんと私が掃除したばかりなのよ。」

みんなはびっくりした。特に息子の嫁はそうだった。その表情はいやなことを言うわね、と読み取れた。そのような雰囲気を知った息子が、直ぐに子供を抱き上げて庭に連れ出した。妻の涼子もやや困惑した表情で言葉はなかった。

その日の夕方である。

「私が子供を注意したのは、奥ゆかしさがなかったのですか？」

妻も私も外国人にどのように説明すればよいのか、難しい問題のように感じた。

「理解しがたいことかも知れないが、日本には見て見ぬ振りという言葉があるのよ。」

妻が切り出すと、すかさずアニタは切り返した。

「知っていますが、それはよくないと思います。」

「日本人はそのような事に出会うと、時と場合を考えるのよ。あえて注意して相手を傷つけることもない、と。」

「親から子供へ、そして孫へ日本人の心の中にあるきれいを伝えるのではなかったのですか、涼子。」

アニタの言葉は厳しかった。妻は考え込んでしまった。沈黙が続いたので、私が後を受けた。

「日本人はまず相手との和を乱さないことを考えるんだ。子供の行ないは、息子夫婦も周りの私たちもよいとは思っていない。でもこの場の楽しい雰囲気を壊さないようにして、

後で注意しよう。ということを考えるんだ。」

「…」

アニタは納得がいかないような表情だったが、それ以上口を開くことはなかった。

数日後の休日、息子の嫁が子供を連れて遊びに来た。アニタと妻は買い物から戻ったばかりだった。先日の出来事が頭をよぎったが、それは取り越し苦労だった。

「ぼくね、今日はばあばあの家(うち)を掃除にきたんだ。」

「おかあさん、先日はすいませんでした。アニタさんに言われて主人ともども反省しました。子供にはしっかり説明して、今日はおばあちゃんの家(うち)をきれいにしようね、と…」

「これが、かあさんが言っていた日本のきれいですね。」

アニタは、笑顔を浮かべて言った。孫が汚した箇所はすでに妻が掃除をしてきれいになっていたが、みんなでもう一度拭き掃除をした。私が廊下の掃除に雑巾がけを教えようと、孫とアニタがお尻を振りながら何度も往復して競い合った。狭い廊下だったが、何度拭いても雑巾に汚れが付く。

「ばあばあ、きれいにならないよ。」

「積年の汚れが出てくるのよ、きっと。」

アニタと孫の感想は同じのようだった。

「その積年の汚れの染みつきが、日本家屋を渋く輝かせるんだよ。」

私は生まれ育った田舎の実家を思い出した。

「そうね、あなたの実家の柱も床も黒光りしているものね、おかあさんの掃除の賜物よ。」

「おかあさん、私、おとうさんの実家へ行ってみたい。」

アニタの唐突な言葉だったが、妻にとってはうれしかぎりだ。

それからしばらくして、家族全員で私の実家へ行った。文字通り私たち夫婦、息子の家族、娘、そして新しく家族の一員になったアニタの7人で。実家は私の父と母の二人のみ。広い屋敷で手入れが行き届かないところもあったが、庭も家の中もきれいだった。

「こじんまりときれいにされているというのは、このような景観を指すのでしょうか。」

アニタの言葉に父が苦笑した。

「日本人より日本的な見方ができるんだね。」

父はアニタを気に入り、アニタの要求に沿って家の中を案内した。畳の部屋や2階の物置などを説明、高温多湿の日本の環境で木造家屋を維持するためには風を通さなければならぬことを力説していた。柱には赤いベンガラを塗り、その表面を布でこすると渋く光ってくると、手で柱をこすりながら得意げな様子だった。

「日本人のきれいさは、おとうさんが言った高温多湿の環境とも関係あるんですね。常に手入れをしないとダメになってしまう。また日本に来た時におかあさん、いや涼子さ

んから聞いた狭い家屋に隣人同士が隣り合わせで暮らしているため、お互いに気を使ってきれいにしていると。日本人はほんとうに素晴らしいと思います。」

それから数ヶ月後、アニタは母国へ帰った。帰国の前日、アニタは数枚におよぶ手紙を私たち夫婦へ手渡してくれた。それにはお世話になったことや楽しかったこと、そして特に妻とは親子関係と同じように接してくれたことに感謝することが書かれていた。妻から学んだ日本人が持っている特有のきれいさに関する美意識が気に入ったようで、日本留学の論文としてまとめたいとも書かれていた。そして最後に、論文を仕上げるのにどうしても妻の力を借りたい、あなただけが頼りなの、と流暢な文章で締めくくられていた。もちろん妻は満面の笑顔になった。

完